

台湾情報誌

交流

2019年5月 *vol.938*

公益財団法人 日本台湾交流協会
Japan-Taiwan Exchange Association

【台湾魅力発信】
林麗蟬・立法委員特別インタビュー



交流

2019年5月
vol. 938

目次

CONTENTS

【台湾魅力発信】

林麗蟬・立法委員特別インタビュー 1
(寺山 学)

2020次期総統選挙に向けた台湾政治動向:

党内予備選挙を巡る攻防 6
(石原忠浩)

『感謝』～目黒リコーダーオーケストラ・台北リコーダーオーケストラ
ジョイントコンサートを終えて～14
(目黒リコーダーオーケストラ 広報担当)

片倉佳史の台湾歴史紀行 第十三回

新竹(2)～台湾北西部の中枢20
(片倉佳史)

日本台湾交流協会事業月間報告32

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人日本台湾交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人日本台湾交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人日本台湾交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も大宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

【台湾魅力発信】 林麗蟬・立法委員特別インタビュー

公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所
総務室主任 寺山 学

今般、台湾の隠れた魅力発信との観点から、長年新住民政策を推進され、現在は立法委員を務める林麗蟬・立法委員に台湾新住民の現状やその文化の魅力についてお話を伺いました。

- ・インタビュー実施日 2019年3月14日
- ・インタビュー実施場所 立法院
- ・インタビュアー 公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所総務室主任・寺山学

＜林麗蟬・立法委員略歴＞

1977年カンボジア・プノンペン生まれの華人。1997年台湾人との結婚後台湾に渡り、台湾中部の彰化県で暮らす。32歳にして大学に入学するとともに、地元のボランティア活動に参加。その後、地域コミュニティー団体である彰化県花壇郷長春地域発展協会幹事長などを歴任。積極的な社会奉仕活動や新住民のための活動が評価され、2013年には「十大傑出青年」に選出。行政院青年顧問、台湾新住民発展・交流協会理事長、台中ラジオ局「私は新住民」番組司会者などを歴任し、2016年には中国国民党の比例選出枠で立法委員に初当選。台湾史上初の新住民立法委員となる。立法委員当選後は、新住民の権利保障のため立法院で活躍中。



※台湾「新住民」とは？

1990年の戒嚴令解除以降、国際結婚やその他の理由により台湾籍を取得した者の総称。内政部によると人口は既に65万人を超え、全人口の約3%を占める。その総人口は台湾原住民の人口約56万人を上回っている。国・地域別では、中国大陸、ベトナム、インドネシア、香港・マカオ、フィリピンの順に多く、日本は全体の1%程度で第8位（出典：内政部移民署）。

【参考】「外国人労働者」

「外国人労働者（foreign workers）」は別の概念であり、外国人労働者とは台湾で就労する台湾籍を取得していない労働者（ブルーカラー・ホワイトカラーを共に含む）を指す。その数は75万人以上とされ、国別ではインドネシア人（約27万人）、ベトナム人（約22万人）、フィリピン人（約15万人）の順に多く、目的別では産業外国籍労働者（約45万人）及び社会福祉外国籍労働者（約26万人）の順に多い。

～新住民について～

(寺山) 今回、長年新住民政策に携わってこられた林委員に台湾の新住民の現状についてお話をお伺いしたいと思います。台湾では近年、新住民の総人口が原住民の総人口を上回ったことがニュースで大きく取り上げられていましたが、新住民とはどのような背景を持つ人々のことを指すのでしょうか。

(林委員) 新住民とは、国際結婚や様々な理由により、中国大陸や東南アジアを始めとする各地から台湾に渡り、台湾籍を取得した人々のことを指します。新住民という言葉が政府の中で使用されたのは、2012年の李鴻源・内政部長が最初だと思います。そのため、今でこそ良く聞く言葉ですが、新住民という用語は非常に新しい概念なのです。

新住民が急増したのは1990年代に入ってからのことです。特に中心となったのは、東南アジア及び中国大陸からの移民です。李登輝元総統は、90年代初頭に「南向政策」を打ち出し、東南アジア地域との経済的連携の強化が図られましたが、東南アジア諸国との経済関係が深化するにつれ、双方間の人的往来が活発化し、結果として東南アジア地域から台湾に移住する人が急増しました。中国大陸との関係においても、特に90年代に兩岸の間の経済的往来が増えたことにより、台湾に



一見すると東南アジアの様な町並み：桃園市の東南アジア人街

渡る人が増加しました。

初期は台湾に渡った外国人と台湾人の自然な形での結婚が多くを占めましたが、90年代中頃から、中国大陸や東南アジアをターゲットとする国際結婚ビジネスが盛んになりました。当時、インターネット上で「大陸人花嫁」や「外国籍花嫁」等のキーワードを打ち込むと、写真などと共に「●●国女性、●●万元」というように、女性の国籍とともに仲介料が表示されていました。人権を無視し、外国人女性との結婚をビジネスとして扱っていた、これが台湾における初期の国際結婚の実態です。こうした初期の国際結婚はまた、台湾人が新住民に対しネガティブな固定観念を持つきっかけともなりました。現在、我々が積極的に新住民と台湾人の交流を促しているのは、こうした台湾人が抱く固定概念を変えるため、徐々にではありますが、その効果は表に出始めており、現在において外国人を対象とする結婚ビジネスは無くなっていないものの、少なくとも「●●国女性、●●万元」などと女性を物として扱うような行為は社会的にも許されなくなっています。

(寺山) 去年の双十節国慶節において、初めて阮秋恆さんというベトナム出身の新住民の方が司会を務めたことは、新住民に対する台湾人の見方の変化を表す一例ではないでしょうか。

(林委員) ご指摘のとおりだと思います。私は阮秋恆さんと大変親しいですが、私は彼女に対しよく、「今のように新住民に対する友好的な環境になったのは、初期に台湾に渡った多くの先輩方の努力と苦勞の賜物であり、感謝の気持ちを忘れては駄目だよ」と話しています。

最近、新住民の多くが台湾の選挙に対し、積極的な態度を示すようになったのも大きな変化です。昨年統一地方選挙では、地方議員選挙に多くの新住民の候補者が立候補していました。あと



台北の東南アジア街①：台北駅前のインドネシア街

一歩で当選というところまで行った候補者も少なくありません。また、選挙に出るだけでなく、投票の際に各地の選挙委員会のボランティア職員として働く新住民も増えています。当初は外国人の顔を見て、「台湾人でもないのに何故職員として働いているのか」と疑問を呈する声もありましたが、時間の経過と共に台湾人の間で理解は確実に広まっています。選挙という公民としての責務を新住民が積極的に担い、そのことを台湾人が理解していくとのプロセスは、台湾社会全体にとって非常に重要な意義があると考えます。

～新住民の多様性～

(寺山) 新住民という言葉には台湾籍を取得した外国人が全て含まれるため、非常に多元的な概念であると思います。それだけに、異なる文化的背景を持つ人々をまとめていくことは難しさもあるのではないのでしょうか。

(林委員) その通りです。新住民は皆それぞれ異なる言語・文化を持っています。ですが、新住民には、「実家を離れ、家族が側にいない」という共通した背景があり、それが故に、新住民は皆自立しなければならないという強い思いを持っています。私はこの共通点を基に、新住民として団結することが重要だと考えます。仮に新住民が中国大

陸、ベトナム、フィリピン、カンボジアなどそれぞれの文化的背景に基づき細分化されれば、我々との間の衝突にも繋がりにくく、また社会的な発言力も小さいものになってしまいます。65万人の新住民の中で最も人口が多いのは中国大陸とベトナム人ですが、比較的人口の少ないカンボジア出身の私が最初の立法委員として選ばれたのも、私が国籍を超えて、新住民のために活動してきたことが認められたからです。この点、新住民同士では言語面での配慮も重要となります。実際、新住民の活動においては、共通語を中国語とし、それぞれの母語の使用は避けるようにしています。中



台北の東南アジア街②：中山北路、金萬萬ビル周辺のフィリピン街



台中市の東南アジア広場：東南アジアの店舗が集中

国語を共通語とすることで、全ての新住民が皆一体となって参加できるようになるのです。

～新住民文化の魅力～

(寺山) 台湾の各地には新住民のコミュニティが形成されつつあるように思います。例えば、台北周辺には台北駅裏のインドネシア街、中山北路のフィリピン街、新北市中和区のミャンマー街などがあります。これらは台湾にしながら東南アジア各国の文化に触れることのできる大変魅力的な場所であり、今後、観光地としての潜在力も高いように思います。

(林委員) そうですね。多様な文化が一つの場所で共存していることは、台湾人として誇りに感じる点です。ただ、観光地として魅力的な場所にしていくためには、まだまだやるべきことが多々あります。例えば、台中駅の近くに「東南アジア広場(東協廣場)」という東南アジア系のショップが集うショッピングモールがあります。ここは、元々第一廣場というデパートだったところですが、近年東南アジア文化が集う広場になりました。ただ、この

ショッピングモールの設備は老朽化が著しく、お世辞にも環境が良いとは言えません。エスカレーターは常に止まったままであるし、エレベーターも突如止まって動かなくなってしまうことがあります。こうした環境の悪さは、台湾人や観光客の間での新住民や東南アジアそのものに対する見方に直結してしまいます。名前を変えれば良いのではなく、中身の改善について真剣に考える必要があるのです。また、新北市中和区のミャンマー街では、最近観光街として指定され、各店舗に統一形態の看板を取り付けることになりました。これは観光地としての魅力を向上させるための策でしたが、看板設置後、かえって同地を訪れる人は減少してしまいました。その原因は、上からの人為的な政策の導入によって、元々存在した異国情緒が失われたことにあるとも言われています。今後、各地の東南アジア文化エリアを観光地として推進していく上で、この2つの事例は大変参考になるかと思います。

～新住民の言語教育について～

(寺山) 新住民の言語教育がまもなく始まると聞いています。具体的にどのように言語教育を行っていく考えですか。

(林委員) 2014年、東南アジア諸言語を初等教育の言語教育の一部として取り入れることが決まり、今年9月から実施される予定となっています。これにより、初等教育の学生は選択必修授業として、ミンナン(台湾)語・客家語・原住民語及び新住民語から一つの言語を選択し学習することができるようになります。更に、新住民語は、ベトナム語やインドネシア語など7つの言語から一つを選択することができます。

他方で、未だ解決できていない問題もあります。その一つは新住民語の教師不足であり、一つの対策としてはオンライン教室の実施があると思います。ただ、その場合には教師や学生が新たにオンラ



東南アジアの民話を題材にした絵本

インの操作方法の習得をする必要が生じてきます。

また、教材の不足も大きな問題です。そこで私は新北市教育局の協力を得て、東南アジア各言語で書かれた教材（絵本）を作成しました。この教材は新住民7つの国に伝わる物語や台湾の物語を題材としており、学生に言語だけではなく、新住民各国の文化に対する理解を深めてもらうことができるよう工夫を施しています。この言語教育を契機に、新住民の子どもたちに自分の母語に触れてもらうと同時に、台湾の他のエスニシティーの子どもたちにも新住民の言語を選択してもらい、彼らの間で新住民に対する理解を増進する機会となって欲しいと考えています。

（寺山）言語の関係では、台湾のテレビにおける新住民語による放送は充実してきている様に感じます。例えば公視テレビ局では、タイ語、インドネシア語など各国語によるニュース番組が放送されています。

（林委員）テレビ放送実現までの道のりは、比較的スムーズでした。テレビ以外にも、各NGO団体は各国語講座を開講しており、各方面で新住民及びその出身地である東南アジア諸国への理解が深まっていると実感できます。これは非常に喜ばしいことです。

（寺山）新住民政策の次のステップについて教えてください。

（林委員）新住民基本法や新住民委員会の設立が大きな目標です。原住民や客家のように、我々新住民も基本法や新住民政策を統括する政府組織が必要になっています。私は立法委員当選後の2016年以來、新住民基本法の制定を立法院で取り上げ続けていますが、正直に申し上げて、この間立法院の反応は積極的なものではありませんでした。基本法は新住民の権利保障にとって重要であり、現在新住民に対し国籍法や移民法など様々な法律が適用されているのを基本法で纏める必要があると考えます。また、新住民委員会を設立することで、今後政府として新住民政策を積極的に講じていくことが可能となります。この点、現状移民政策を所管するのは移民署ですが、各政府機関より下の第三級機関であり、組織上、上部機関にあたる教育部や衛生福利部に指示を出したり、各部を統括するのが困難な立場にあります。その意味で、新住民委員会が設立されれば、各政府機関の調整や統一的な政策の実行が可能となります。

実際には基本法の制定や委員会の設立にはまだまだ時間を要するというのが正直な感想ですが、諦めることなく、立法院や世論の理解が得られるよう引き続き努力していきたいと考えています。

（編集：寺山、柴原、写真：寺山）



2020 次期総統選挙に向けた台湾政治動向：党内予備選挙を巡る攻防

石原忠浩（台湾・政治大学日本研究プログラム 助理教授）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

2020年1月投開票の次期総統選挙に向けた与野党のかけひきが激しくなっている。与党民進党は現職の蔡英文総統に対し、ポスト蔡英文の最有力とみなされていた頼清徳前行政院長が挑戦し、政権奪回をもくろむ国民党は、朱立倫前新北市長、王金平前立法院長といった古参政治家に加え、昨年大ブレイクした韓国瑜高雄市長、鴻海精密工業を率いる著名企業家の郭台銘氏が名乗りを上げ大混戦となっている。さらに、無所属ながら、昨年の台北市長選挙で僅差で再選を果たした柯文哲氏も出馬の可能性を否定しておらず、次期総統選挙に挑む顔ぶれは5月上旬の段階で未定という前代未聞の混戦状況となっている。本稿では、昨年の統一地方選以降の台湾政治の流れを整理する。なお、兩岸関係、対外関係は紙幅の都合上触れない。

1. 次期国政選挙は2020年1月11日に実施

選挙事務を統括する中央選挙委員会は、2018年12月に3回にわたり実施した公聴会及び主要政党の民進党、国民党、時代力量、親民党から意見を聴取した結果、次期総統・副総統選挙及び立法委員選挙を2020年1月11日に同時実施する決議を行った。

2018年11月の統一地方選挙と同時に実施され

た住民投票については、行政院から提出された関連法案が立法院で審議されているが、行政院提出の草案では、同性婚など人権問題に関連するテーマを議題から外すべきとの方向で修正されているほか、選挙事務予算を削減するとの立場から旧法では国政選挙と同時に「実施すべき」であるとの表現を緩めた内容となっており、6月までの立法院での議論次第であるが、今後住民投票と国政選挙は別々に実施される可能性が高くなっている。

2. 5月上旬段階での総統選挙に関する動向

5月上旬の段階で、次期総統選挙の候補は民進党、国民党ともに複数の候補が名乗りをあげているほか、昨年の統一地方選挙で再選を果たした柯文哲台北市長のほか、2012年、2016年の総統選挙に出馬し、一定の得票数を獲得している宋楚瑜親民党主席も出馬の可能性を残すなど混沌としている。

そうした中でも、当地の有力メディアの多くは、民進党、国民党、柯文哲の三つ巴の戦いを想定した世論調査を行った。

4月下旬に「聯合報」、「TVBS」など大手メディアは総統候補の支持率調査を行った。表1は聯合報による国民党有力候補4氏の支持率比較である

表1 国民党総統候補の支持率調査

	韓国瑜	郭台銘	朱立倫	王金平
全体支持率	26%	19%	13%	11%
20-39歳	21%	23%	16%	12%
40-59歳	30%	22%	14%	10%
60歳以上	28%	9%	7%	11%
藍系支持者	48%	23%	13%	4%
緑系支持者	7%	17%	16%	26%

資料元：「2020 総統大選 本報最新民調 26%拱韓 19%挺郭」、「聯合報」、2019年4月22日、頁1。

表2 民進党総統候補の支持率調査

	全体		民進党支持者	
	20181224	20190421	20181224	20190421
頼清徳	46%	35% (- 11)	57%	38% (- 19)
蔡英文	14%	25% (+ 11)	26%	51% (+ 25)
いずれも不支持	25%	21%	8%	4%
未決定	16%	19%	9%	7%

資料元：「2020 大選 本報民調 綠營支持度 蔡頼逆轉」、『聯合報』、2019年4月22日、頁2。

が、韓市長が他の三氏をリードする結果となった。支持者の年齢層では、40歳以上の中高年齢層は韓市長が独走状態であるが郭氏は40歳以下の層でトップを確保した。政党支持層では、韓市長が藍系支持者からの圧倒的支持を得ているのに対し、朱、王両氏の古参政治家は緑系からの支持が多い結果となった。

次に、民進党候補の支持率調査からはこの4ヶ月の変化が感じ取れる。昨年12月と今年4月の調査による比較であるが、全体調査と民進党支持者に限った調査結果を報じている。全体調査では、頼前院長が蔡総統を依然としてリードしているが、民進党支持者を対象を絞った調査では、蔡総統への支持が逆転する結果となった。これは、蔡総統が現職の強みを活かして、地方視察を頻繁に行い、自身の3年にわたる業績を宣伝したほか、農民団体との会談では肥料価格の引き下げを提起するなど即効性のある政策をアピールし、民進党

支持層を中心に支持を拡大、浸透した証左と言えるのかもしれない。

本誌4月号でも指摘したが、民進党が党内予備選の日程を当初の予定より1か月以上遅らせ5月末以降に延期したことについて、頼陣営が強い不満を表明したのは、予備選期間が延びることは、行政資源を活用できる「蔡陣営に有利、頼陣営には不利」となる懸念を裏付け結果となっている。

上述した国民党、民進党候補の支持率調査を踏まえたうえで、柯台北市長も交えて行った聯合報の調査結果を表3に示した。4月末の段階では、韓郭両氏が国民党公認として出馬した場合は、柯市長、蔡総統と頼前院長のいずれの候補よりもリードする結果となった。一方で国民党が朱立倫、王金平を公認候補とした場合は、柯市長の支持率がトップとなった。言い換えるならば、国民党は韓郭両氏が出馬すれば、有利な戦いだが、朱王両氏では柯市長の後塵を拝する可能性が高く、

表3 国民党、民進党、柯文哲有力3候補の支持度比較

国民党	無所属	民進党
韓国瑜 36%	柯文哲 26%	蔡英文 20%
韓国瑜 36%	柯文哲 26%	頼清徳 21%
郭台銘 31%	柯文哲 27%	蔡英文 20%
郭台銘 30%	柯文哲 28%	頼清徳 22%
朱立倫 25%	柯文哲 34%	蔡英文 20%
朱立倫 23%	柯文哲 34%	頼清徳 23%
王金平 13%	柯文哲 39%	蔡英文 19%
王金平 11%	柯文哲 39%	頼清徳 24%

資料元：「2020大選 本報民調 韓国瑜 36%勝算最高 郭台銘吸泛綠票略勝一籌」、『聯合報』、2019年4月22日、頁3。

表4 国民党、民進党両党の有力候補の支持度比較

国民党		民進党	
韓國瑜	52%	蔡英文	34%
韓國瑜	50%	賴清徳	37%
郭台銘	44%	蔡英文	35%
郭台銘	42%	賴清徳	38%
朱立倫	41%	蔡英文	35%
朱立倫	36%	賴清徳	41%
王金平	27%	蔡英文	35%
王金平	22%	賴清徳	42%

資料元：「韓國瑜政治獻金爭議，2020 總統可能人選民調」、『TVBS』、2019年4月29日、https://cc.tvbs.com.tw/portal/file/poll_center/2019/20190502/11c410e5cfc598e0e678224513a9161d.pdf

民進党候補は現段階では3番手に位置していることが見て取れよう。

なお、「TVBS」も類似の世論調査を4月下旬に行っているが、国民党有力候補の支持率は韓>郭>朱>王、民進党も頼>蔡という支持率順位で聯合報の調査と大同小異である。一方、「TVBS」は三者対決の調査以外に柯市長が出馬しない場合の国民党 VS 民進党の二大政党対決の調査も行った(表4)。この調査でも、国民党の韓郭両候補の両候補が民進党の蔡頼両候補にリードする結果となった。

次節以降は、民進党、国民党の動向をそれぞれ整理する。

3. 民進党の動向

民進党は昨年の統一地方選での大敗後、政権運営の立て直しを図るため、党人事、行政院の人事刷新をはかることとなった。

選挙敗北の責任を取り早い段階で総辞職を表明していた「頼清徳内閣」は年明けの1月10日に総辞職し、新任院長には、陳水扁政権時代に同職を務めた蘇貞昌氏が「復帰」し、副院長には陳其邁氏が就任したが、その後の組閣で台中市長選挙で再選に失敗した林佳龍氏が交通部長に抜擢されたことで、台湾メディアや国民党関係者は新北、台

中、高雄市長に落選した三氏が要職に就いたことで「敗戦者聯盟」、「失敗者内閣」などと揶揄した。

蔡主席に代わる党主席には、蘇嘉全立法院長が同職を辞任し党主席に就き、党再建を担う可能性も報じられたが、最終的には党内主流派に押される形で陳水扁政権で総統府副秘書長、行政院秘書長などを務めた卓榮泰氏が推挙され、1月5日に実施された主席選挙でシンクタンクを主催し、現政権に批判的な言動を展開する游盈隆氏を退け主席に当選した。秘書長には陳水扁台北市長時代の側近だった羅文嘉氏を抜擢した。

一方、蔡総統は年初に習近平国家主席が台湾同胞に告げる書40周年時の講話で、「一国両制による統一」をはじめ強硬な対台湾政策の路線を打ち出したことに対し、強く反発し、中国側が台湾側に一貫して求めている「92年コンセンサス」の受け入れを改めて拒否した。また、その後発生した中国軍機の台湾海峡中間線の越境飛行をはじめとした台湾に対する威嚇的な軍事動向に強硬な言動で中国側をけん制した。

春節明けの2月19日には、蔡総統は米CNNの独占インタビューを受け、次期総統選挙への出馬を表明するとともに、過去の自身の一部施政に対し反省を述べる一方で「やるべきことがまだたくさんある」として、再選への意欲と自信を語った。

3月16日の立法委員補選は「引き分け」で党勢凋落を止血したことで党内では、「英徳配」(蔡頼ペア)という考えられる中での最強コンビで韓國瑜を迎え撃つべきだとの声が高まった。しかし、週明けに頼氏が総統選挙党内予備選への登記を完了したことで、最強ペア形成の目論見は崩れた。翌日の台湾各紙は「奇襲」、「震撼弾」、「党内有力派閥の新潮流派も困惑」などと驚きをもって頼氏の出馬を報じた。

蔡総統は、自身の党内選挙の手続きを済ませた後、3月下旬に南太平洋の友好国であるパラオ、ナウル、マーシャル諸島を訪問し、帰国時のランジットではハワイに立ち寄り関係機関への視察

のほか、ワシントンで開催されたシンポジウムにビデオ中継で講演を行うなど精力的に活動して帰国した。帰国後の3月29日には、現副総統の陳建仁氏が来年5月以降は副総統職にはとどまらなると表明したが、この動向は蔡陣営が頼氏を取り込み「英徳配」結成に向けた布石とみなされた。

4月8日に、民進党中央は蔡総統と頼前院長の両名を交えて話し合いを行ったが、各自が従来の主張をただけで協議は不調に終わり、当地メディアは「蔡頼直球対決へ!」と報じた。協議不調のまま「直球対決」に突入するかと思われた矢先、4月10日に開催された民進党中央執行委員会で予備選の5月末以降への延期を決定した。

その後、蔡総統は、15日に台湾関係法40周年記念シンポジウムの開催の際に、AIT主席、ライアン米下院前議長らとともに出席し、現職総統として米台関係の強化を内外に印象付けた。両陣営は地方行脚やメディアへのアピールをする傍ら、SNSなどを中心としたネット空間におけるネガティブな批判合戦が激化していることに対して、非難合戦の様相も見せた。蔡総統は、「党内選挙の実施は党内の亀裂が拡大される」とし、「話し合いによる自身の候補選出」を支持者に訴えた。一方で、頼陣営は民主的競争によって党内の総統候補を選出するプロセスの重要性を強く訴え、自身の党内選挙からの撤退はありえないと主張している。

このまま、世論調査による「直球対決」となるのか、話し合いによる選出になるのかは未だに不明であるが、民進党候補は国民党候補及び柯市長に支持率で落伍している現実を直視する必要がある。

4. 国民党の動向

(1) 有力者の相次ぐ出馬宣言

昨年11月の統一地方選挙で大勝した国民党は、政権奪回に向け自信を得たことで、党内からは早い段階で総統候補を選出し、立法委員選挙も含む

次期国政選挙に挑むべきだとする声が高まった。

こうした雰囲気の中で新首長就任日の2018年12月25日、朱立倫前新北市長は満を持して次期総統選挙への出馬表明を行った。朱前市長は、2015年1月に前年の統一地方選挙で大敗して引責辞任した馬英九主席に代わり、火中の栗を拾う形で党主席に就任し、その後も頑なに固辞した挙げ句、最終的には党内の圧力に抗えず、クーデターに近い形で洪秀柱を党公認候補から引きずり下ろし、2016年の総統選挙に出馬したが惨敗している。

朱前市長の出馬表明直後に聯合報が実施した世論調査では、ご祝儀相場も後押しし、民進党の蔡頼両名との対決を想定した調査で朱56%蔡22%、朱47%頼32%と圧勝の結果となって表れた。一方で柯市長が出馬した三者対決時の調査では、柯41%朱28%頼18%となり、柯市長の後塵を拝する結果となった。

当初は、朱前市長、王金平前院長のほか、呉敦義主席も「総統選挙出馬に30年間準備してきた」と吐露したように出馬への野心を隠そうとせず、党内選挙の既存のルール(党員投票30%、世論調査70%)を自身に有利とされる党員投票の比率を50%に引き上げることを画策するなど、世論調査だけによる決定を主張する朱陣営を牽制する動きも見られたが、2月末には党内規定に従い上述の「三七方式」に従って決定する方針を党中央は採択した。また呉主席自身の出馬に関しては3月の立法委員補選後に決定するとした。その後、2月26日には、周錫瑋元台北県長、3月7日には王金平前院長が党内選挙への出馬表明を行った。

しかし、総統選挙の前哨戦とも称された3月16日の立法委員補選が「引き分け」に終わり、翌々日に頼前院長が民進党の党内選挙出馬を決めると国民党内では、危機意識が高まり、韓市長期待論が浮上したことで、呉主席は、自分の出番は無いと判断したのか4月10日に不出馬宣言を行い、韓市長を中心とした候補者選びに腐心することに

なった。

(2) 韓国瑜期待論と郭台銘出馬表明の衝撃

春節以降の台湾政治は韓市長を中心に展開した。韓市長は就任直後こそ政見公約通り、高雄の経済振興に邁進する姿が毎日のように報道されたが、2月中旬以降は、地方首長の範疇を超え两岸政治問題、国防問題等国政イシューについての言動が目立つようになった。2月中旬、韓市長は週刊誌のインタビューで蔡總統の两岸政策について「独立する勇気もなく、中華民国も愛さない、無責任だ」などと批判した。

一方で、注目すべき事象は就任直後の首長としては、極めて異例の頻繁な外遊である。韓市長は、就任4ヶ月の間に3度も外遊を断行したが、その外遊先での言動が世論の韓期待論と連動していく。

外遊その①

2月24-28日のマレーシア、シンガポール訪問：

主な目的は、高雄の農漁産物の売り込み、現地華人社会との交流のほか、マレーシアでは州議員、下院議員との会見などが報じられた。



韓市長とツーショットの国民党の立法委員党内予備選参加者

外遊その②

3月22-28日の香港・マカオ・中国南部訪問：

韓市長は選挙の時から「政治0%経済100%」のスローガンを掲げるなど、極端な経済重視姿勢を打ち出し、政治原則に拘り中国との経済関係が停滞していると民進党政権を厳しく批判してきた。今回の訪中の目的も経済交流活動の促進であり、農漁産物の売り込み、企業誘致、都市交流であったはずだが、実際には政治活動が際立つこととなった。

香港、マカオでは、当地トップの特別行政区行政長官と会見したほか、中国の出先機関の中央政



韓市長の総選挙出馬を支持する台北市議の看板

府駐香港連絡弁公室内で関係者と会見した。また深圳、厦門では中共市委員会書記と会見し、さらに深圳では中国政府の台湾問題主管機関である劉結一國務院台湾弁公室主任と会見し、1月上旬に習近平主席が「一国両制度下の統一促進」を明白にし、同発言に対し台湾世論が大きく反発していたにもかかわらず、韓市長は「92年コンセンサスを強く支持する」など、中国側に迎合するような言動が緑陣営だけでなく、幅広い台湾世論から「台湾が一国両制度の枠組みに押し込まれる」と厳しく指弾されたが、韓主張は「主権と経済は分けて考えるべきだ」との持論を展開し、意に介することはなかった。

外遊その③

4月9-18日米国訪問：

ハーバード大、スタンフォード大での非公開座談会における講演とボストン、LAなどでの華人社会との交流、企業視察が主な目的であったが、この頃には、党内で韓市長を総統候補に推す声が高まっていたこともあり、訪米中の言動が逐一報道される異例の状況となった。訪米中においても、メディアからの次期総統選挙出馬についての質問は途切れることはなかったが、台湾経済の問題について言及した際、韓市長は「過去に3人の台湾大学法律学部（筆者注：台湾の最高学府であり、日本の東京大学法学部に相当）の卒業生が総統を務めたが（陳水扁、馬英九、蔡英文）、台湾経済と競争力は彼らが駄目にした」と発言したほか、日米中との関係においても「国防靠美國、科技靠日本、市場靠大陸」（国防は米国頼り、科学技術は日本頼り、市場は中国頼り）と論じた。特に、今なお台湾で一定の支持と人気を有する馬前総統への批判は、国民党陣営にも大きな衝撃を与え、「りんご日報」と「聯合報」は韓市長の同発言を15日付朝刊の一面トップで報じた。

「流れ弾」を浴びた形になった馬前総統の事務所は「馬総統は、金融危機と欧州債務危機を乗り切った」と指摘し、当時行政院長を務めていた呉

主席もTVインタビューで「自分が行政院長時代の台湾経済は好調だった」と不快感を露わに反駁していたのが印象的であった。自身の所属政党の前総統と現主席を批判したことで、党内から一定の反発を受けるのは想定内の反応だったのかもしれないが、これも「韓流スタイル」（韓式風格）であり、既存の国民党支持層とは異なる根強い「韓粉（韓ファン）」を魅了する理由なのかもしれない。

国民党は、そのまま韓市長を担いで選挙に臨むのかと思われた矢先、同15日に蔡総統ら政府要人も出席していた台湾関係法40周年記念シンポジウムに出席していた郭台銘氏が、韓市長の経済に関する発言を意識して「国防靠和平、市場靠競争、技術靠研發」（国防は平和、市場は競争、技術は研究開発頼り）と発言し、米頼みの安保への不安と技術革新は、他国に頼るのではなく、自身による研究開発努力が重要との企業家らしい発言をして注目されたが、翌日には「総統選挙への出馬を考慮しており、2日以内に決定する」と発言し、台湾世論を驚愕させた。その驚愕の余韻が残る中、翌17日には国民党中央常務委員会で呉主席より党中央委員会名誉状を授与され、その挨拶の場で総統選挙予備選への参加を正式に表明する激震となった。

郭台銘ショック後に米から帰国した韓市長は、23日に記者会見を開催し、自身の総統選挙への態度を初めて正式な形で語った。次期総統選挙については「責任を果たす気持ちはある」とし、出馬の可能性を否定しなかったが、「現行制度による党内選挙には参加できない」と指摘した。その一方で、「国民党上層部の密室政治は国民の期待とかけはなれたものになっている」と党上層部の運営を批判した。同声明を筆者なりに噛み砕いてみると、表面上？総統選出馬に躊躇しているのは、高雄市長に当選したばかりの立場として、市長職を途中で投げ出し総統選に臨むことは、高雄市民への裏切りにもなりかねないので理解できる。しかし、本音では、「党全体に要請されるのであれば、

予備選に出馬することは可能である」との強烈的な意思を示したことになる。しかし、密室政治批判は、馬前総統批判に続く党執行部及び郭氏の出馬宣言に至る一連のプロセスへの大きな不満の表出であり、党内部の権力闘争を赤裸々に反映したものと見え、藍系支持者にも大きな衝撃を与えており、筆者には国民党や韓市長自身にもダメージを与えた記者会見となったように思えた。

その後、国民党は、24日に中央常務委員会を開催し従来の「三七制度」の規定に代わり「2020 総統選挙提名特別辦法」を制定し、党内有力候補による全世論調査で候補を選出する方案を示し、同時に呉主席は自ら党内選挙に出馬意向を示している王、周、朱の三氏及び韓市長と個別に会談を行った。その場でも韓市長は、「高雄市民の期待が肩にかかっており、現在の状況では党内予備選への参加はできない。しかし、党中央が他の方法やアレンジを有するのであれば、尊重する」と記者会見と同様の回答を示した。

5月4日に党中央は、党内選挙への参加は、「申し込み手続き」、「選挙事務費 500 万元の納付」、「候補者の政見発表会への参加」の3要件を満たす必要があるとの決議を行った。本決定は、自らの意志による出馬を渋る韓市長に対して、例外扱いはせず、いかなる候補者も規定の手続きに従って予備選への参加を義務付ける条件を提示したことになる。

国民党の基層レベルや、立法委員選挙に挑もうとする人々には韓市長待望論が圧倒的に強く、台北市の筆者の選挙区でも現職市議が現職立法委員に党内予備選で挑む候補は、「韓國瑜の総統選挙出馬を支持する」と書かれた看板を掲げており、韓流人気にあやかるという狙いが明白であり、馬英九人気絶頂の時代を彷彿させられた。呉主席を中心とする執行部は、最人気の韓市長との微妙な緊張関係を保ちつつ、党内団結、分裂回避を第一として党内選挙を運営する難しい舵取りが迫られている。

国民党は5月14日に中央常務委員会を開催し、改めて総統候補指名特別辦法を採択した。同辦法によると、党中央が指名した曾永権副主席、郝龍斌副主席らを含む協調小組が選挙情勢を評価し、選挙に勝てる実力を有する党员を予備選に招聘する形で有力候補を選び、6月10日に予備選参加リストを公表する。その後、同23日から7月4日にかけて北部、中部、南部で候補による3回の政見発表会を行い、7月6日から14日にかけて世論調査を実施して、同調査の結果をふまえて、7月28日の党大会で正式に党公認候補を指名するとの決定を行った。同辦法の採択により、高雄市民への約束という理由から、自主的な出馬を渋っていた韓高雄市長が党中央に要請される形で総統選予備選出馬への道が開かれることとなった。

5. 柯文哲台北市長の動向

柯市長も韓市長と同様に総統選出馬に対し、曖昧な発言に終始し時には、昨今の韓流ブームに埋没する中で「自分の存在が周辺化されつつある」など自虐的なボヤキにも似た発言が垣間見られるが、自身の出馬については6月以降に考えると述べている。

政党組織を持たない、柯市長にとっては選挙時に吹く風が重要であることは論を待たない。1月の台北市の立法委員補選では、自身の直系候補が惨敗したことで組織の重要性を痛感し、政党立ち上げの必要性に言及したこともあったが、その後は具体的な動きはない。

柯市長の取りうる戦略は、市政に邁進し着実に成果を重ね支持を広げる一方で、SNSを駆使し若年層の支持層を引き続き開拓していくことなどに限られてくるのかもしれない。とはいえ与野党の総統候補選出過程で混乱が継続し、国政にも影響を与えるような事態になれば、台湾世論から、民進党でもない国民党でもない第三勢力の伸長への期待が湧きあがることも想起され、柯市長は動く

機会を虎視眈眈と伺っているのかもしれない。

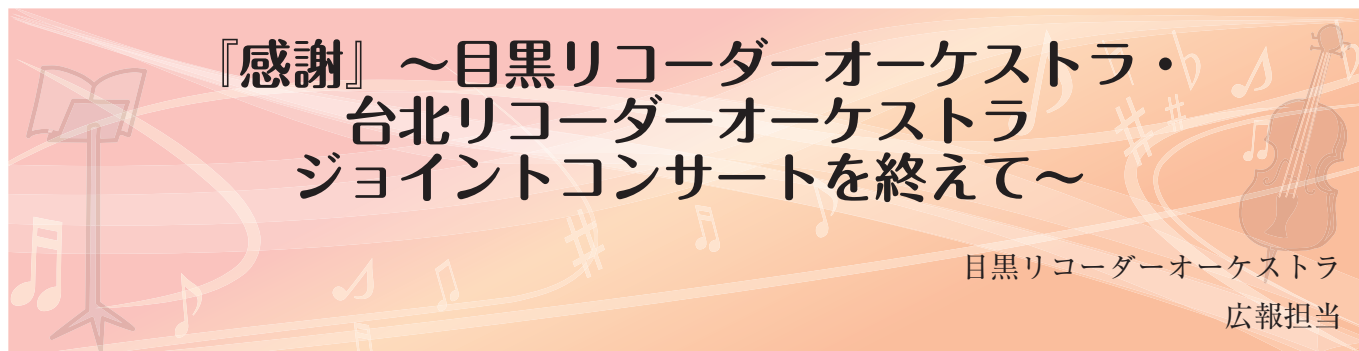
6. 若干の展望

民進党、国民党の総統候補を決める党内選挙は延期されているものの、両党では4月以降、総統選挙と同時に実施される立法委員の選挙区候補の党内予備選が開始している。台湾の大政党の選挙区候補の選出は、複数の候補が名乗りをあげた場合は当該選挙区が現職か否かに関わらず、ほとんどが党内選挙を実施している。民進党の中では、6期連続の当選者はじめ、複数の現職委員が予備選挙で新人候補に敗れるなど、白熱した展開が繰り広げられている。

昨年11月の統一地方選挙で民進党が大敗した

時は、多くの台湾人が4年前の選挙で惨敗した国民党が坂を転げ落ちるように2016年の国政選挙でも一敗地に塗れたのを想起し、2020年の国民党政権の復活を予想したはずである。しかしながら、総統選挙まで7か月前に迫った段階で「上げ潮の国民党」、「凋落の民進党」の双方がそれぞれ党内権力闘争を展開し、その間隙を縫って白色力量の柯文哲氏も機会を伺うなど混沌としており、全く先を見通せる状況にはない。

たとえ混沌としても、国民両党はともに遅くとも7月中には総統候補を選出し、柯市長も決断をしているはずである。今後2ヶ月は引き続き、熱い戦いから目が離せなさそうである。



日本台湾交流協会では、日台文化交流に有意義な催しに助成・名義を付与する形で協力しています。ここでは、目黒リコーダーオーケストラが台北リコーダーオーケストラとジョイントコンサートを行った様子をお伝え致します。

日台の老若男女になじみの深い楽器による双方の音楽性を取り入れた演奏は、台湾のお客様にも楽しんでいただけました日台の団員同士の絆も深まったようです。

私たちは、目黒リコーダーオーケストラ（以下、MRO）という、リコーダーだけで編成されたアマチュアのオーケストラです。

MRO は、2018 年秋に台湾の台北リコーダーオーケストラ（以下、TRO）とのジョイントコンサートを日本（9月16日）と台湾（10月7日）で行いました。ジョイントコンサートを開催するにあたり、日本台湾交流協会に後援と助成の申請をし、ご快諾いただいたことで、無事公演の成功を収めることができました。このたびの日本交流協会のご支援、ご協力に深く感謝いたします。

■助成金をいただくまでのこと

MRO は、広くリコーダーオーケストラの魅力を伝えたいとの思いから、結成当時より無料のコンサートを実施しており、今回も海外遠征費を含む全てを団員による自費での企画となりました。

特に今回は、初めての海外での演奏、たくさんの大きな楽器を含む 50 名ほどの大人数での移動ということから、旅行会社にツアーを委託し、団員の出費は多大な金額になることが予想されました。

そのような中、ホームページで日本台湾交流協会の存在を知り、コンサートの 1 年前となる 2017

年 11 月に何も分からないままに電話でお話しを伺ったところ、申請の時期や方法を詳しくご説明いただきました。

あらためて、翌 2018 年 3 月に MRO の副会長と広報担当者が本部に出向き、直接お話をお伺いしましたが、持参した私たちの過去のコンサートチラシやプログラム、写真を見て MRO の活動に興味を示して下さい、後援依頼の件や助成申請について懇切丁寧にご指示いただけたことは大変有り難いことでした。



スイス・ペッツォルト社のコントラバスリコーダーがデザインされたおしゃれなコンサートチラシ

■ MRO の紹介

台湾公演の活動報告の前に、MRO の紹介をさせていただきます。MRO の発足は、10 年前の 2009 年。東京都目黒区が主催したアートウィークで「リコーダーオーケストラをつくろう」という講座に集まったメンバーが中心となって結成されました。ふだんは月に一度、おもに目黒区内の施設で練習しています。コンサート前は集中練習やパート練習もあります。また、年 1 回、合宿をして集中練習をし、メンバー同士の親睦を深めています。

演奏活動としては 2010 年 4 月に、東京都中央区晴海の第一生命ホールで第 1 回コンサートを開催して以降、1 年半ごとに定期演奏会を行っているほか、目黒区音楽祭出演、東京清瀬市のけやきホールでの演奏など活動の場を広げています。

60 名もの MRO メンバーを支えているのが執行部です。会長、副会長をはじめ、会計、広報、ライブラリアン、会場係など、さまざまな役割をメンバーで担っています。時には、練習後に数時間にわたり話し合いをすることもあります。アマチュアの団体ですので、運営費はメンバーからの会費でまかっています。

リコーダーは日本では小学校の音楽の授業で取り入れられているため馴染みがあり、大人になってからも気軽に演奏を楽しめる楽器ですが、60 名の大人数で、定期的に活動を行っている団体は世界でもあまり例がありません。

MRO の指揮・指導をしてくださっているのは、リコーダー奏者の松浦孝成先生です。先生は MRO 指導のほか、大阪や東京の清瀬でもリコーダーオーケストラの指導をしています。また、日本各地で講座を持ち、演奏活動も行っている気鋭の奏者です。

MRO における松浦先生のご指導では、練習の

はじめに音合わせをします。MRO で使われているリコーダーは、10 種類。ソプラノ、アルト、テナー、バス。グレートバス、コントラバスを中心に、曲によってはソプラノより高い音のクライネソプラニーノ、ソプラニーノ、コントラバスより音が低いサブグレートバス、サブコントラバスです。これら全体、または、パートごとに音を出し、微妙な音の違いを先生が指摘してくださり、わずかな高低差を調整していきます。

音が整ったら曲の練習が始まります。リコーダーに限らず楽器はみなそうですが、ただ演奏できるというだけでは“音楽”にはなりません。楽譜に記載されている記号に沿い、アーティキュレーションをそろえていく必要があります。音符や休符ひとつにしても、同じパートの全員が同じ長さにする、また旋律の捉え方やブレスのタイミングを合わせる事が大切です。松浦先生の指導はそういった細かいところまで行き届き、ひとつの楽曲が“音楽”になるよう導いてくださいます。こうした先生のご指導のおかげで、MRO の演奏は日々成長を続けています。

■ ジョイントコンサート開催まで

松浦先生から MRO に TRO とのジョイントコンサートの話があったのは 2 年前の 2017 年。



劉永泰先生と松浦孝成先生

TROの指導をしている劉永泰先生からのお申し出がきっかけでした。劉先生は、17年前に当時松浦先生が所属していた東京リコーダーオーケストラが台湾の台北アリーナでコンサートを行った時にサポートして下さった関係で、松浦先生とは旧知の間柄。当初は松浦先生が主催する大坂のリコーダーオーケストラレッスンの講座にお話があったのですが、大阪のオケは定期的な活動ではなかったため、松浦先生がMROに話をもってきて下さったのです。そのお話をいただいたとき、MROメンバーは驚きと喜びと戸惑いと、さまざまな気持ちが渦巻いていたように思います。そのときは本当に実現するかどうかもわからないままのスタートでしたが、執行部と松浦先生で話し合いを重ね、東京・台湾公演の日程・会場が決まると、いろいろなことが動き始めました。

東京公演と台湾公演の間が1か月弱でしたので、2公演分の事務仕事が執行部に集中しました。TROとの連絡は英語が堪能なメンバーが務めました。決めなくてはならないことが多く、大変だったと思います。東京公演では、TROを迎える側として、練習会場の手配や交通、宿泊の案内、食事の手配、当日のリハーサルから本番、その後のレセプションまでのスケジュールリングなど、細かいことを何度も話し合いを重ねて決めていきまし



台湾公演の会場となった新荘文化藝術センター

た。また、2018年1月に劉先生が台湾から視察にお出でになり、MROからも7月に会長と松浦先生が台湾に行き、視察や打ち合わせも行いました。

■東京公演後、いよいよ台湾公演へ

東京公演の前日、9月15日にTROメンバーが来日。リハーサルが初顔合わせでしたが、TROメンバーが明るくフレンドリーに接して下さったおかげでみなすぐに打ち解け、楽しく練習を終えて、本番に臨むことができました。演奏会後のレセプションも、身振り手振りをしながらの会話もあって大いに盛り上がり、次の台湾での成功を誓ったのでした。



台湾公演の様子。TROとMROが合同演奏

この東京公演では、演奏後に劉先生が北海道胆振東部地震（2018年9月6日に発生）で被災された方々に心を痛めていることを語り、松浦先生とともに、会場で販売されたCD等の売上金全額を義捐金としてご寄付くださいました。両先生のお心遣いに感謝したいと思います。

さて、いよいよ台湾に出発です。MROメンバーが羽田空港に集合したのは10月6日の早朝。旅行会社に委託したとはいえ、グレートバスやコントラバスといった大型楽器の梱包、搬入、荷物の手続きなどもすべてメンバーが行いました。このとき持っていった大型楽器は13本。空港の大型カート2台分もありました。

台北の松山空港に着き、休む間もなく手配してあったバス2台に乗り、リハーサル会場へ。ここでは、TROのみなさんがあたたかく迎えてくださり、旅の疲れも吹き飛びました。

台湾公演当日、バスで会場まで向かうとTROメンバーはすでに私たちを迎える準備を整え、笑顔で出迎えてくれました。控室や通路など細やかに教えてくださり、ボリュームたっぷりのランチの用意してくださり、安心して本番に臨むことができました。

公演のプログラムは、劉先生と松浦先生で一つのテーマとしてお互いの文化や根にあるリズムやメロディーを取り入れるということ話をしていた



ホワイトボードに歓迎のメッセージ



台湾公演の演奏曲

とのことで、「祭り」のタイトルが入った曲がそれぞれに並びました。距離的にそれほど遠くないのに、どちらも島国ということもあり、雰囲気が違う「祭り」が奏でられたと思います。

台湾のお客さまはとてもマナーがよく、演奏が始まる前も客席は静まり返っていたため、お客さまが入っているのかと不安になるほどでした。そして演奏が始まると熱心に耳を傾けてくださり、リコーダーに対する情熱が伝わってきて、気持ちよく演奏することができました。アンコールでは台湾で馴染みのある『快樂の出帆』を演奏しましたが、劉先生が曲名を口にしたとたん、客席から大きな拍手がわき上がり、調子良く、楽しく演奏を終えました。お客さまはTROとMROそれぞれの演奏を楽しんでくださったことと思います。そして、「音楽に国境はなく、素晴らしいものは素晴らしい」という感想もいただきました。

■公演終了後のこと

台湾公演も無事に終わり、今度はこちらがもてなされる側でレセプションに参加しました。会場となったレストランでは、乾杯の前にサプライズ



レセプションで記念撮影

でプロモーションビデオの上映がありました。映像には、TROメンバーの東京到着からリハーサル、東京公演本番、さらに台湾公演のリハーサルから公演までの様子が映し出されていました。バックミュージックは公演時の演奏曲。それを見て、大きい事を成し遂げた実感が湧き、熱いものがこみ上げてきました。そのプロモーションビデオはTROメンバーが作成したものとのことで、メンバーの多才さにも感嘆したものです。

レセプションで用意されたお料理は、どれも美しく、そしておいしく、なによりボリュームたっぷり。すでに親睦を深めていたメンバー同士、会話もはずみ、サインを求めたり、LINEのアドレスを交換したり。みな笑顔&笑顔で、さらに交流を深めることができました。そのときの記念撮影は、忘れることはないでしょう。

レセプション後は、台北101ビル、夜市などに観光にいったグループ

や、ライトアップされた橋などを見に行ったグループもあり、それぞれに台湾の雰囲気を楽しんでいました。

移動とリハーサル、公演を2泊3日の強行スケジュールで行ったため、観光は最終日の午前中のみになってしまいましたが、バスで忠烈祠、中正記念堂をまわることができました。バスで移動し



忠烈祠にて。兵隊さんの交代の様子を見学しました



十分にて。ランタンでコンサート成功のお礼をしました

ている間、通訳の方から台湾内の情勢や歴史の話などをご説明いただき、メンバーの交流だけでは知りえなかったさまざまなことがわかり、大変参考になりました。

最後に土産店に寄って、昼前に松山空港に到着。初の海外公演成功の喜びを胸に、MRO メンバーは帰国しました。

今回、この公演を後援・助成していただいたことで、日本在住の台湾の方からのコンサートへの問い合わせもあり、幅広い方々に知っていただくことができました。それは、さらに良いコンサートをして、より多くの方々に喜んでいただきたいという指揮者、MRO メンバーの士気を上げることにつながり、コンサートまでの練習・本番も大変活気のある有意義なものとなりました。

また、メンバー同士の交流が生まれ、かけがえない友情が生まれました。コンサートの大成功もうれしいことでしたが、音楽を通して日本と台湾の交流ができたことが、何より貴重な体験となりました。

あらためまして、このたびの日本台湾交流協会のご支援、ご協力に深く感謝いたしますとともに、

今後もさまざまな形で交流を続けて参りたいと思います。

目黒リコーダーオーケストラ
広報担当

■ MRO の今後の活動

2020年、東京オリンピック開催前の5月10日に第一生命ホールで第7回コンサートを開催予定です。チケット予約などの詳細は未定ですが、決まり次第、ホームページやフェイスブックで紹介させていただきます。また、YouTubeにこれまでのコンサートの様子がアップされていますので、こちらをご覧ください。

MROは、これからも多くの方々にリコーダーオーケストラの魅力と楽しさを伝えられるよう練習に励んでまいりますので、今後とも応援どうぞよろしくお願いいたします。

目黒リコーダーオーケストラ

HP : <http://mrecorder.web.fc2.com>

FB : Meguro Recorder Orchestra

YT : <https://www.youtube.com/user/RecorderOrchestra>



2020年5月10日 第7回コンサートでお会いしましょう！

新竹（2）～台湾北西部の中枢



片倉 佳史（台湾在住作家）

新竹は台湾の北西部に位置する産業都市である。台北から約 60 キロ離れた場所にあり、地域の中核となっている。人口は約 45 万人となっており、近隣の広範な地域の中心となっているためか、人口以上に賑やかな印象である。前回に続き、この都市の歴史について紹介してみたい。

新竹市内を歩く

新竹（しんちく）は台湾北西部の中枢として機能する都市である。台北との結びつきは強く、当然ながら両都市の往来は盛んである。新竹を訪れる際、台北から台湾高速鉄路（台湾高鉄・高鉄）を利用するのが一般的だが、高鉄新竹駅は郊外の竹北（ちくほく）市に設けられている。そのため、市街地までのアクセスを考えると、所要時間は在来線を利用する場合と大きな差はない。

台湾高速鉄路の所要時間は 30 分ほどである。ここで台鉄（在来線）に乗り換え、新竹駅までは所要 19 分となっている。高鉄と台鉄の駅は隣接しているものの、在来線の駅名は「六家」となっている。

この駅は 2011 年 11 月 11 日に開設され、隣りの内湾線竹中駅までの一駅間が六家線となっている。六家線の列車はすべて内湾線に直通し、新竹駅が終点となる。なお、在来線で台北から新竹まで移動した場合、所要時間は自強号で 1 時間あまりとなっている。

風向が考慮されていた駅前通り

日本統治時代の駅舎が風格を誇る新竹駅から市内を歩いてみよう。地図を見ると、駅の北側に市街地は広がっており、駅を中心に放射状に道路が延びている。その中で、現在は中正路と呼ばれている道路が日本統治時代に整備された駅前通りで



街の玄関口となっている在来線新竹駅。終日賑わいを見せるターミナルだ。

ある。

台湾の都市は台北をはじめ、東西南北の方角に忠実に道路配置がなされていることが多い。これは日本統治時代の都市計画によるものだが、新竹市の場合、区画整備はしっかりとされているものの、向きが北西の方向に斜めになっている。

これは風の吹く方向を意識した結果であるという。新竹は「風の町」として知られ、特に冬場に山岳部から吹き下ろす風に晒されるため、火災が多かった。これを受け、風の通りぬけを考慮し、街路の向きが決められることとなった。

確かに、駅前通りだった中正路は駅舎の正面に伸びるわけではなく、向きも曲がっている。

新竹の中心「迎曦門」

中正路を進んでいくと、突きあたりに「迎曦門（げいぎもん）」がある。大きなロータリーの中央にあり、城楼がどっしりとした構えを見せている。

清国統治時代の新竹は、城壁に囲まれた城郭都市であった。1827年から2年間の工事を経て、城壁は完成したとされている。当初は4つの城楼（城門）が設けられていたが、北門は火災に遭い、南門と西門は都市計画によって撤去された。東門（迎曦門）は其中で唯一残された存在である。なお、石材は中国大陸から運び込まれたものが用いられたと伝えられる。

城壁については、1902（明治35）年に東門から南門までの間が取り壊され、これを皮切りに撤去されていった。当時の台湾では治安の維持と衛生事情の改善が急務だったが、城壁の撤去によって取り出された石材が兵營の建設と上下水道の整備に使用された。これは台北城においても同じことが行なわれている。



護城河は緑に包まれ、美しい景観を誇っている。のんびりと散歩を楽しみたい空間である。

なお、迎曦門付近の城壁の跡地には濠が設けられた。この濠の周辺は緑地として整備され、市民の憩いの場となっていた。戦後は無秩序な開発によって、美しさが失われていたが、2000年頃から景観整備が熱心に進められ、現在は「護城河親水公園」と呼ばれる緑地となっている。見事なまでに繁茂した緑が印象的な空間である。

風格を保つ専売局と校長官舎

迎曦門から東門街を東に進むと、民族路との交差点に「臺灣菸酒公司新竹營業所」がある。ここは日本統治時代の専売局で、当時の建物が今も残っている。

この建物を設計したのは台南銀座（現・台南市中正路）や台北市松山の専売局たばこ工場（現・松山文創園區）の設計者である梅澤捨次郎である。竣工は1935（昭和10）年で、翌年5月から使用された。

建物は装飾を排したシンプルな外観だが、よく見ると、表面にはスクラッチタイルが貼られており、水平曲線が緩やかに湾曲した壁面にアクセントを付けている。シンメトリー（左右対称構造）と正面上部に据え付けられた装飾も印象的だ。また、規則正しく並んだ窓も整然とした雰囲気演出している。

ここから東門街を東に進むと、一軒の日本式木造家屋が残っている。ここは日本統治時代に建て



迎曦門は市街地の中心に位置し、新竹駅、新竹市政府、城隍廟がほぼ等距離にある。日本統治時代の様子。



迎曦門の周囲にはロータリーが整備されている。新竹の城門は日本統治時代初期に撤去され、迎曦門だけが姿を留めている。

られた家屋で、旧制新竹中学の校長官舎だった。

詳細な記録は残っていないが、建物は1922（大正11）年頃に竣工したものと推測されている。大正期の官舎によく見られた和洋折衷様式で、畳敷きの和室のほか、板敷きの洋間もあり、家屋の裏手には庭園もある。現在は公共空間となっており、多目的スペースなどが設けられている。

新竹中学は1922（大正11）年に開設された。新竹州下には、ほかに新竹高等女学校があり、実業学校として、新竹商業学校、新竹工業学校、桃園農業学校などがあつた。なお、新竹中学は開校間もない1926（大正15）年に新校舎が完成したため、郊外に移転し、旧校舎に女学校が入ったという経緯をもつ。

戦後、この家屋は新竹高級中学（高等学校に相当）の初代校長・辛志平氏の邸宅となった。1985



日本統治時代の専売局。現在も往時の姿を保っている。



校長官舎は和風建築ならではのたたずまいが色濃く漂っている。床の間なども残されている（東門街32号・月曜と祝日は休館、参観無料）。

年以降は長らく廃墟のような状態になっていたが、現在は新竹市が管理する史跡となっており、一般公開もされている。

博物館となった常設映画館

迎曦門から中正路を先に進むと、終戦まで「新竹有楽館」という名で親しまれていた常設映画館がある。新竹市を代表する公共空間でもあり、現在は新竹市から史跡の指定を受けている。

ここは映画文化をテーマとする博物館となっている。ホールは往時の姿を保っており、ドキュメンタリー映画などの上映会が随時行なわれている。無料のイベントも多く、市民の評判はおおむね良好な様子だ。

この建物は新竹市によって設けられた最初の公共娯楽施設だった。座席数は560席。収容人数は最大で700余名を誇ったという。新竹市では指折りの大型建築でもあつた。また、全館フルエアコンシステムを採用していたことも特筆される。

竣工は1933（昭和8）年11月15日。総工費は6万円という記録が残っている。鉄筋鉄骨コンクリート構造の2階建てで、建坪は259坪だった。工事依頼は新竹市役所から出されている。設計は台湾総督府営繕課技師の栗山俊一が担当した。

外観はモダニズムを踏襲するシンプルなデザインだ。壁には台北郊外の北投の窯で焼かれたタイルが貼られている。装飾を排した地味な印象だが、これはこの時代によく見られたスタイルである。なお、台湾各地で数々の建築を手がけてきた栗山俊一にとって、ここは台湾総督府技師としての最後の作品となっている。

戦時中は空襲に遭ったが、その後に修復され、戦後は「國民戲院」と名前を変えて営業を続けていた。しかし、施設の老朽化と映画産業の衰退によって閉館に追い込まれる。その後は長らく廃墟となり、無惨な姿を晒していたが、郷土の歴史を見守ってきた史跡として保存しようとする動きが



有楽館は新竹の自慢であった。小さいながらも映画にまつわる文物を展示するスペースがあり、大きな冷房機も残されている。



戦後も映画館となっており、新竹市民なら知らない人はいないとも言われる存在だった。日本統治時代の様子。台湾協会提供。

出てきた。そして、2000年、新竹市影像博物館として整備された。

装いを新たにした建物は、古さを全く感じさせていない。創建からすでに80年あまり。竣工時は時代の最先端を走っていた建物も、今やすっかり町の古参に仲間入りしている。新竹を訪れた際にはぜひ立ち寄ってみたい歴史スポットである。

日本統治時代の新竹の様子

新竹市の骨格は日本統治時代に整えられた。1938(昭和13)年に大規模な都市計画が立てられ、台湾北部を代表する都市として面目を一新した。

市街地は東西南北にそれぞれ東門町、西門町、

南門町、北門町があり、駅周辺が榮町、州庁付近は旭町と呼ばれた。旧市街は城隍廟を中心とした東門町付近だが、日本統治時代に旭町付近が整備され、これが新興開発エリアとなった。ここには官舎群が数多く設けられていた。

東門町は清国統治時代からの繁華街で、城隍廟を中心に発達している。市街地は当初、ここを中心として、南門町と北門町に広がっていた。家屋が密集しており、乾いた風が吹き付けるため、火災が頻繁に起こっていた。そのため、近代的な消防署が設けられた。ここは現在、消防博物館となっている。

駅の裏手は黒金(くろがね)町と呼ばれていた。ここには鉄道部の倉庫群や職員住宅などが並んでいた。ただし、この辺りはここ数年で再開発が進められ、日本式の木造家屋は一掃されてしまった感がある。

新竹公園が設けられた花園(はなぞの)町は昭和時代に入ってから整備されたエリアで、ここには官僚や軍関係者の官舎が並んでいた。

また、市街地の北側には錦(にしき)町、田町(たまち)と呼ばれる地区があった。現在は痕跡を残していないものの、錦町には帝国製糖株式会社の製糖工場があった(昭和15年に大日本製糖



新竹図書館は1925(大正14)年に設けられた。現在は保険会社の所有物となっている。『台湾紹介最新写真集』より。



市政府の後方には、戦時中に竹東方面で開発が期待された天然ガスの研究所も置かれていた。この建物は現在、新竹市の衛生局として使用されている。



旧新竹州庁。新竹を代表する建築物。壮麗なたたずまいに触れてみたい。館内の参観も可能だ。



新竹水源地は市街地の東、十八尖山に設けられていた。竣工は1929(昭和4)年3月。現在も濾過池が保存されているほか、遙拝所の石段やポンプ室が残っている。



官庁舎らしく、重厚な雰囲気が漂う。柱や欄干の装飾に注目したいところ。赤煉瓦の壁面と日本風の黒瓦が印象的だ。

に吸収合併されている)。駅と工場の間には専用鉄道も敷設されていた。現在、工場の跡地は「遠東巨城購物中心」というショッピングモールとなっている。

また、軍用飛行場も設けられ、これは現在、中華民国空軍が引き続き使用している。

新竹を代表する官庁建築

迎曦門のロータリーから中正路はやや向きが変わる。ここをさらに進んでいくと、新竹市政府(市役所)がある。日本統治時代に新竹州庁舎として建てられた官庁建築で、1926(大正15)年12月4日に竣工し、翌年から使用されている。

建物は2階建てで、「コ」の字型をしている。こ



日本統治時代に撮影された古写真。新竹州は台湾西北部の広範な地域を管轄していた。『古写真が語る台湾 日本統治時代の50年』(祥伝社)より。

れは日当たりと風通しを考慮した配置であるという。正面に立ってみると、赤煉瓦の落ち着いた色合いが印象的だが、屋根の部分には黒瓦が用いられており、さりげなく東洋的な雰囲気が混じって

いる。

シンメトリーを重視し、荘厳な雰囲気強調するのは戦前の官庁建築に共通した特徴である。当初は正面が2階建てで、その他の部分は平屋となっていた。

1944（昭和19）年の空襲で一部が倒壊したが、現在も現役の官庁舎として使用されている。館内の見学もできるので、ぜひ歴史建築の趣に触れてみたい。

日本時代の市役所は美術館に

新竹市美術館は市が運営する芸術空間である。日本統治時代に新竹市役所として建てられた建築物で、竣工は1930（昭和5）年となっている。

1920（大正9）年に施行された「市街庄制」によって、新竹郡内に「新竹街」が置かれた。ここはその役場として設けられた。その後、1930（昭和5）年に新竹街が新竹市に昇格すると、市役所に改められた。

赤煉瓦造りの2階建てで、シンメトリーが美しい。新竹州庁（現・新竹市政府）と同様、屋根には日本風の黒瓦を用い採光窓が設けられていて、アクセントとなっている。大きな建物ではないが、しっかりとした風格を感じさせる官庁建築である。



小さいながらも存在感を示す公共建築。戦後は戸政管理事務所として使用されていた。



新竹市章「竹」の文字をモチーフにしたものだった。1935（昭和10）年末の新竹市の人口は5万3469名で内地人（日本本土出身者）は5977名だった。『日本都市大観』より。

終戦後は中華民国政府に接収されたが、1991年からは戸政管理事務所として使用されるようになった。そして、2001年には史跡に指定され、行政による保存の対象になった。3年がかりの修復工事を経て、2007年からは多目的スペースとしても機能するようになった。現在は展覧会やイベントなどが随時、開かれている。

「中山路」を進む

新竹市政府（旧新竹州庁）の正面を走るのは中山路と呼ばれる道路である。この一帯は日本統治時代に「表町」と呼ばれていた官庁街だった。

新竹市政府の前には警察署と消防署が道路を挟んで対峙している。新竹警察署の建物は1935（昭和10）年に落成した。当時の警察署建築によく見られたスタイルで、他にも台北南警察署や彰化警察署などで似た建物が見られた。

向かいにある消防署は現在、博物館となっている。先にも述べたように、新竹は強風が吹きつけることで知られ、空気が乾燥する冬場を中心に、火災が頻繁に起こっていた。そのため、消防は日本統治時代初期から非常に重視されていた。



消防署は現在、消防博物館となっており、内部の参観が可能だ。風の強い町なので、火災には万全の体制が敷かれていた。消防に関する展示物のほか、警鐘なども残されている。



新竹市政府の右隣りには新竹市議会がある。その前に置かれているのは旧新竹神社の狛犬である。

建物の竣工は1937（昭和12）年。設計は新竹州営繕課が担った。この建物は装飾とは無縁で、飾りのようなものは一切見られない。中央には市内を見おろせる櫓が設けられ、地上6階分の高さを誇っていた。これは日本統治時代、新竹で最も高い場所でもあった。

同時に、これは日本統治時代の台湾でよく見られた消防署のスタイルだった。昭和期に建てられた各都市の消防署は、似たようなデザインの建物が多い。現在も台南市や雲林県虎尾に日本統治時代の消防署が残っている。

城隍廟と北門街

城隍廟は信仰の中心として賑わう名刹である。その歴史は古く、清国統治時代の1748年に創建されている。廟は絢爛な装飾が施されているが、

一方で、重厚な雰囲気ももっており、独特な風情を漂わせる。

敷地内には数多くの屋台が並んでいる。いつ訪れても熱気に包まれており、新竹を代表するグルメスポットとなっている。新竹名物のビーフン（米粉）や損丸湯など、食べ歩きを存分に楽しめる空間だ。

ここには台湾の伝統芸能である「歌仔戲（こあひー）」の常設舞台がある。運が良ければ観劇も可能だ。この付近には古い家並みが残っており、路地裏探検も楽しい。

旧市街の趣が感じられるのは、城隍廟と迎曦門を結ぶ東門街と新竹中央市場付近で、雑然とした感じはあるものの、活気に満ち溢れている。人々の暮らしぶりを肌で感じられる場所である。

また、城隍廟から伸びる北門街も散策が楽しい。ここは大正時代に整備された家並みが残っており、中国大陸南部に由来する伝統家屋を見ることが出来る。華南地方に特有の亭仔脚（台湾式アーケード）が見られ、赤煉瓦の壁面と建物正面上部に設けられた装飾が印象的だ。

繁華街のような賑やかさはないが、歴史を感じさせる趣深い家並みが続く。老家屋を利用した喫茶店などもあるので、休息を取りながら、散策を楽しんでみたい。肉まんて有名な「黒猫包」もここにある。



城隍廟は1924（大正13）年に改修工事を受けている。精緻な彫刻も見見る価値は高い。毎年旧暦7月15日に盛大な例祭が開かれる。

新竹公園と新竹市立動物園

新竹公園は広大な面積を誇る都市公園である。ここは1919（大正8）年の都市計画によって誕生した。この計画は州庁舎の竣工に合わせた周辺地域の整備と、この公園の開設が二大事業とされていた。

公園は新竹駅の裏手に広がる丘がそのまま敷地となっている。この丘は「枕頭山(ちんとうざん)」と呼ばれ、十八尖山に連なっている。この辺りは終戦まで「花園町」と呼ばれていた。

公園は4年計画で設けられた。敷地内には周遊道路のほか、花壇や池が設けられ、橋を渡すことで景観が整えられた。採掘した土砂は築山に用いられ、この小山は「赤山（せきざん）公園」と呼ばれていた。

なお、開園時から花壇が知られていたが、現在は河津桜が名物となっている。これは日本から贈られたものであり、春先には多くの花見客が押し寄せている。台湾は南方にあるため、日本よりも少し早めの桜が楽しめる。

敷地内には運動場やプール、テニスコートなどもあったが、中でも動物園の存在は広く知られていた。これは1936（昭和11）年6月5日に児童遊園地の付随施設として設けられた。開園後、同月19日にはエチオピアからやってきたライオンが2頭、公開されて話題となった。

児童遊園地は新竹市の市制施行5周年を記念して設けられたもので、当初は台湾随一の規模を目指したものだ。しかし、1935（昭和10）年の新竹・台中州大地震で計画が縮小されてしまった。

新竹・台中州大地震は1935（昭和10）年4月21日午前6時2分17秒に台湾北西部を襲い、死者3276名という甚大な被害を与えた。全壊家屋は1万7907戸におよび、台湾史上最大の惨劇と言われた。新竹州下の苗栗、竹南、大湖の三郡、台中州下の豊原、大甲、東勢の三郡で大きな被害が

出ている。

現在、動物園には日本統治時代の門が残っている。これは一対の門柱の上にライオンが向かい合い、大きな象が来場者を迎えている。

その奥には噴水があり、これも戦前からのものである。さらに、傍らには新竹神社に置かれていた石灯籠が残っている。石灯籠についての経緯は不明だが、戦後の混乱期、ここに運び込まれたものと推測される。また、分解された石灯籠は鹿が飼われている柵の中にも見られる。

最も驚かされるのは日本統治時代の鳥籠が残っていることであろう。これは半球状の大きな鉄籠で、園内に3つ残っている。こういったものが残るのはこの新竹動物園だけで、鳥籠は史跡の扱いを受けている。



動物園には日本統治時代の鳥籠や噴水などが残っている（現在動物園は休園中）。2008年撮影。



ゲートには戦前の門柱が残る。大きな象の彫像が時代を感じさせている。

ここは台湾にある動物園の中では最も長い歴史を誇っている。現在は大がかりな修復工事が進められており、休園中となっているが、今夏に営業再開が予定されている。

日本統治時代の自治会館が博物館に

ここは日本統治時代の建築物を使用した博物館である。新竹の地場産業となっているガラス工芸の紹介がなされているほか、作品やオブジェなどが展示されている。

台湾のガラス工芸は日本統治時代に興ったもので、新竹にも工場が設けられ、主に工業用ガラス製品が製造されていた。戦後は工芸品が多く作られるようになり、この博物館でも数々の作品が展示されている。精緻な細工や製品たちは息を呑むほどの美しさとなっている。

建物は日本統治時代に新竹州自治会館として建てられたもので、竣工は1936（昭和11）年12月25日。新竹に市制が敷かれたのは1930（昭和5）年1月20日のことだったが、これを記念して建設が決まった。費用は新竹州下の自治体から寄付を募り、賄われた。

建物では各種集会が行なわれたほか、来賓の宿泊所にもなっていた。2階にホールや食堂、貴賓室などが設けられ、そのほか、囲碁室やビリヤード場などもあったという。

建物は赤煉瓦造りのスタイルからモダニズム建築へ変わる過渡期によく見られたデザインである。シンプルながらもセンスを感じさせる美しい建物は、現在、史跡にも指定され、保存対象となっている。外壁には北投産のスクラッチタイルが貼られ、アクセントとなっている。

玻璃工藝博物館（ガラス工芸博物館）として整備されたのは1999年12月18日。現在は裏手にある4棟の木造家屋も修復され、市民の憩いの場となっている。これらの木造家屋は1930年代に建てられたかつての軍人用官舎である。戦後は中

華民国軍が使用してきたが、その後は長らく廃墟然としていた。現在はこれらの木造家屋も歴史建築として保存対象となっている。



新竹公園の敷地内にある博物館。もともとは共同墓地だった場所が公園として整備された。



壁には意図的に縦型の傷を付けた「スクラッチタイル」が貼られている。



園内には池が設けられている。かつての料亭や軍人官舎だった建物が残されている。

新竹神社跡地に残る日本の黒松

市の南西には新竹神社があった。市街地からは離れていたが、州庁前の道路がそのまま参道になっていた。神苑は広く、台湾屈指の規模を誇った。

日本統治時代、台湾には大小 200 を超える神社が設けられていた。しかし、終戦とともに廃せられ、神苑と施設は中華民国政府に接収された。新竹神社の場合、中国からの不法滞在者や亡命者の収容所になっていた。部外者の立ち入りは厳しく禁じられていたが、敷地内には神苑がほぼ手つかずの状態に残っており、社務所や神楽殿が往時の姿を留めている。

新竹神社は牛埔山に設けられ、1918（大正 7）年 10 月 25 日に鎮座している。翌々年には県社に昇格。1942（昭和 17）年 11 月 25 日には国幣小社となった。神苑には社務所のほか、祝詞家や神官宿舎なども設けられていた。

筆者は関係者の好意でこの場所を撮影する機会に恵まれた。現在、拝殿・本殿跡は整地されていて、姿を留めていないが、石畳の部分はしっかりと残っていた。そして、石段を上がり、収容所の建物を抜けると旧本殿跡地の脇に、見事に生い茂った黒松が見えた。これは日本本土から移植されたものとされる。詳細な記録は残っていないが、興味深いところである。なお、現在、新竹市



新竹神社の社務所。神苑は 1895（明治 28）年 8 月 8 日に近衛師団が露営した場所を整備したとされる。1940（昭和 15）年 10 月 23 日には新社殿が竣工したが、これは現存しない。

の市樹は「黒松」となっている。

新竹神社の遺物とも言うべきものは市内各地に点在している。たとえば、手水鉢や石灯籠は郊外



本殿の跡地に残る黒松。日本から持ち込まれたものである。



新竹神社鳥瞰図。大国魂命、大己貴命、少彦名命、北白川宮能久親王を祀った。



石灯籠や手水鉢は郊外に位置する青草寺・靈隠寺に移設され、保存されている。

の青草湖・靈隠寺に移されている。また、狛犬は新竹市政府横の市議会前に置かれている。さらに、石灯籠の一部は先述した新竹市立動物園の中に移設されている。

博物館の整備に熱心な町

新竹市は歴史建築の保存を精力的に進めており、清国統治時代の古刹をはじめ、日本統治時代に建てられた官庁建築などが保存対象となっている。同時に、こういった建物を博物館とし、市民との接点を設けようとする努力も続けられている。

具体的には、先述した常設映画館「有楽館」（新竹市映像博物館）や、同じく日本統治時代の消防署を整備した新竹市消防博物館、自治会館を整備した玻璃工藝博物館などがある。いずれも歴史建築を有効利用したケースとして注目されている。

そんな中、とりわけ興味深いのが眷村博物館である。「眷村」とは、中華民国軍人が暮らす集落のことで、国民党政府が中国大陸を追われ、台湾に逃げ延びてきた際、下級兵士が一時的に暮らすことを目的に設けられた集落である。多くは簡易住宅や不法に設けられたバラック群で、モルタル造りの平屋で庭はなく、周囲が高い塀に囲まれていることが特色とされる。

これらは簡素を極める建物ではあったが、国民党による一党独裁時代には、あらゆる優遇措置がとられていた。しかし、訪れてみると、無表情な家屋群が、不気味なまでに閉鎖的な雰囲気を出していた。

新竹は日本統治時代に軍事用の飛行場が設けられ、現在も中華民国空軍の飛行場として使用されている。そのため、終戦直後から空軍関係者が多く住むようになった。新竹市内には47の眷村があったとされる。そして、新竹市は総人口の約2割程度が外省籍であると言われ、いわゆる統一派勢力の地盤にもなっている。

眷村博物館は2002年12月28日に開館した。

現在はこういった眷村の文化もまた、台湾史の一部であり、台湾の文化の側面であるという考え方が浸透しつつある。

木造駅舎が残る小さな駅

新竹市の郊外に位置する香山駅は日本統治時代の木造駅舎が今も使用されている。駅が設けられたのは1902（明治35）年8月10日。当初は「香山坑（こうざんこう）」駅を名乗っていた。

現在の駅舎は1927（昭和2）年7月8日に竣工したもので、当時の地方駅によく見られたスタイルである。駅舎は駅務室と駅員の仮眠室、そして待合室で構成されている。建坪は11.14坪と大きくはないが、しっかりと存在感を放っている。

この駅に限らず、日本統治時代に設けられた台湾の木造駅舎は、いずれも扉がない。これは南国特有の疫病や風土病を考慮したもので、風通しが重視された結果である。また、直射日光を避けるため、必ず大きな庇を持っている。これも南国仕様というべきもので、日本本土ではあまり見られない台湾特有のスタイルである。特に昭和初期に台湾各地で見られた駅舎建築のスタイルである。

駅前に商店らしきものはないが、すぐ目の前の幹線道路に出れば、何軒かの店がある。この道路は往来が激しく、古風な木造駅舎には不釣り合いである。その先を進んでいくと、青い海原が広がっている。

以前、新竹在住の古老から興味深いエピソードを教えられた。台湾西部の海は遠浅で知られ、かつては牡蠣の養殖が盛んだったという。しかし、その多くは隣町の竹南産として、台北に送られていた。そのため、香山の名が産地として知られることはなかった。現在は牡蠣の養殖は行われていない。

また、かつて、香山は南隣りの崎頂（きちょう）とともに、海水浴場として知られていた。夏場には海水浴を楽しむ人々が多かったというが、そういった賑わいも過去のものとなっている。



2001年5月31日、駅舎は新竹市から古蹟の指定を受け、行政による保存が決まった。



小さな待合室にも落ち着いた空気が漂っている。駅前を進んでいくと海に出られる。砂地ではスイカの栽培も盛んに行なわれていた。



台湾の西海岸は遠浅が続く。海水浴場は過去のものとなったが、美しい夕陽は今も変わらない。

知られざる日本時代の寺院建築

駅舎の背後には牛の背のようななだらかな山並みが広がっている。その名も牛埔（ぎゅうほ）山。領台当初、日本軍と日本の統治を甘受しない人々が激しく戦火を交えた場所である。

その山腹に日本統治時代に開かれた寺院が残っている。「一善堂」と呼ばれるこの寺院を訪れる人は多くない。知る人も少ないが、往時の姿をしっかりと保っている。

本堂は新竹・台中州大地震で半壊し、1936（昭和11）年に建て直されたものであるという。赤などで塗色されてしまっているため、古色蒼然とした雰囲気ではないが、やはり日本人の目には慣れ親しんだ寺院のスタイルである。傍らには石灯籠の基石なども残っている。

香山駅からは長く続く坂道を上っていく必要があるが、時間があれば訪ねてみたい場所である。



日本式の寺院建築が残る一善堂。本堂は新竹市が指定する史跡となっている。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。武蔵野大学客員教授。早稲田大学教育学部教育学科卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。主著に『古写真が語る台湾 日本統治時代の50年』、『台湾に生きている日本』、共著に『台湾探見-ちょっぴりディープに台湾体験』、台湾生活情報誌『悠遊台湾』など。最新刊は『台北歴史建築探訪～日本が遺した建築遺産』（ウェッジ）。

ウェブサイト台湾特捜百貨 <http://katakura.net/>

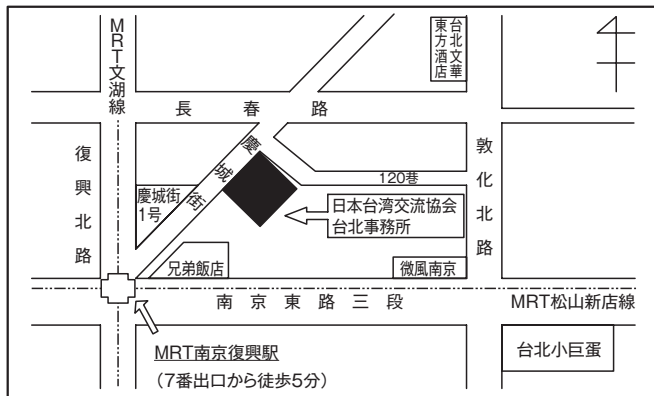
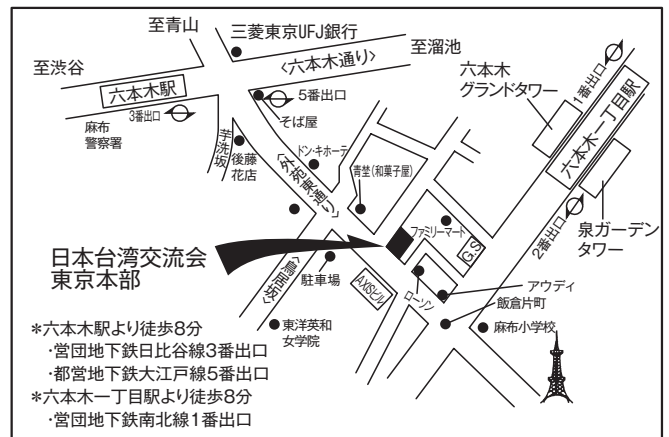
日本台湾交流協会事業月間報告

主な日本台湾交流協会事業（4月実施分）

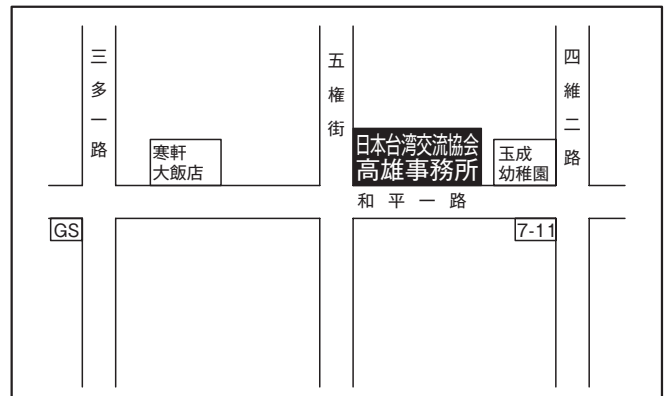
4月	場所	内容	主な出席者（日）	主な出席者（台）
8日	台北市	鹿児島銀行台北駐在員事務所開業式典（於：大倉大飯店）	沼田代表、堀井主任（台北）	顧立雄・金融監督管理委員会主任委員 他
9日	高雄市	高雄医学大学と（一社）メディポリス医学研究所との医療提携MOU調印式	福崎（一社）メディポリス医学研究所副理事長、岩倉次長、三谷主任（高雄） 他	陳建志・高雄医学大学董事長、鐘育志・高雄医学大学校長 他
9日	高雄市	高雄日本人学校学校運営委員会	又平主任（高雄）	
10日	台北市	日本気象協会・建構民生公共物聯網計画推動小組 MOU 締結式（於：北科集思會議中心）	星野副代表、南澤主任（台北）	吳政忠・政務委員（行政院科技會報弁公室）、呂忠津・建構民生公共物聯網計画推動小組召集人、古市信道・日本気象協会常務理事 他
10日	台中市	領事出張サービス	北野主任（台北）	
10日	高雄市	高雄日本人学校入学式	加藤所長、又平主任（高雄）	
11日	台中市	台中日本人学校小学部・中学部入学式出席	鶴見主任（台北）	
13日	台北市	台北日本人学校小学部・中学部入学式出席	西海副代表（台北）	
17日	台北市	近鉄グループホールディングス鰻料理店「江戸川」開店セレモニー	沼田代表、松田主任（台北）	黃士弦・交通部台湾鉄道管理局餐飲服務總所總經理、林坤源・交通部觀光局主任秘書 他
17-30日	台中市	客員教授派遣事業（台中科技大学）	山下悠・滋賀大学准教授	
18日	台北市	楽天銀行情報セキュリティセミナー（於：台湾大学管理学院）	沼田代表、堀井主任（台北）	魏啓林・國票金グループ董事長 他
19日	台北市	日台産業協力架け橋プロジェクト交流會議	星野副代表（台北）、北条貿易經濟部次長（本部）、三谷主任（高雄） 他	楊志清・經濟部工業局副局長、李冠志・國際貿易局副局長、周立・駐日台北經濟文化代表事務所經濟部部長、林慶鴻・台湾日本關係協會副秘書長、陳龍・TJPO 組長 他
19日	台北市	和服入門講座	浅田主任、樺島派遣員（台北） 他	
20日	屏東市	第4回手漉き紙に見る玉富文化風景写真展開幕式	加藤所長、又平主任（高雄）、宮崎悌三・静岡県台湾事務所所長	林協松・屏東市長、黃俊潔・屏東怡然芸術協会理事長
21日	台南市	領事出張サービス	駒屋主任（高雄）	
22日	台北市	2019年臺灣部落觀光嘉年華（於：觀光服務中心）	星野副代表、松田主任（台北）	周永暉・交通部觀光局局長 他
27日	台北市	台北日本語授業校卒業式・修了式出席	鶴見主任（台北）	

令和元年5月25日 発行
 編集・発行人 舟町仁志
 発行所 郵便番号 106-0032
 東京都港区六本木3丁目16番33号
 青葉六本木ビル7階
 公益財団法人 日本台湾交流協会 総務部
 電話 (03) 5573-2600
 F A X (03) 5573-2601
 U R L <http://www.koryu.or.jp>
 (三事務所共通)

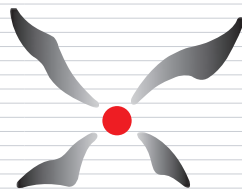
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社
 印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓
 Tong Tai Plaza., 28 Ching Cheng st., Taipei
 電話 (886) 2-2713-8000
 F A X (886) 2-2713-8787



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号
 南和和平大樓9樓・10樓
 9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan
 電話 (886) 7-771-4008 (代)
 F A X (886) 2-771-2734



公益財団法人

日本台湾交流協会

Japan-Taiwan Exchange Association

